

マネジメントチーム News

令和5年6月号

第1回マネジメントチーム地域連絡会を開催しました

今回も地域によって、さまざまな課題について活発な意見交換ができました。



● 中讃地域

5月18日

今回は、話題提供とサポート委員の紹介を兼ねて、野口委員から NPO 法人メロディーの事業紹介、大西委員から相談支援について説明がありました。その後、グループに分かれて話をしました

大人グループでは、きょうだい児や地域の人など周囲の人のことを受け止める場所がないことや障害分野と高齢分野の連携の課題や自立援助ホームについて知る機会となりました。

子どもグループでは、放課後等児童デイサービスで学校の宿題に取り組むことで本来の活動や療育に取り組めないというような悩みがどの事業所にもあるようでした。小学校の先生からは、宿題は1人で出来るものにして「出来た!」という経験をする方がいいのではないかという意見も出ました。学童の支援員の方からは、支援員が少ない、子どもの情報がほとんどないことの問題点があがりました。専門家委員の松浦先生が参加され、薬との付き合い方についてお話をいただきました。

終了後も、メンバーさんからサポート委員に声を掛けてくれることが多くあり、これまで以上にそれぞれの現場での情報や困りごとを共有する機会となりました。



● 西讃地域

5月23日

今回は、メンバーさんが各機関でどういう業務をしているのか情報共有をじっくり行うことができました。今まで以上に子どもから成人、保護者の方に対する社会資源を共有・イメージできる機会となりました。

保護者支援では、保護者の理解が乏しく支援者

からすすめられて医療機関を利用した場合、継続的な相談にならず子どもの理解に繋がりにくいという話がありました。また、軽度の発達障害の相談が増えており、1歳半健診で指摘された経緯はあるが小学校で個別の支援を受けていない環境でつまづくことが多く、就学前までの周りの大人や支援者の関りも含め子どもの成長過程が大事になる等、各機関の現状や支援について考える場となりました。

きょうだい児さんの居場所について、地域でどのような取り組みができるか話し合う機会もあり、地域会ならではの連携ができたと思います。

今回は、サポート委員小西さんから社協について情報提供してもらう予定です。皆さんの参加をお待ちしております。



● 小豆地域

5月18日

新しく開校した『小豆島みんなの支援学校』について情報を共有しました。生徒 12 名、教員 13 名。小学部と中学部の 9 年間の学校ですが、高等部も中部支援学校の分教室があるそうです。地域の特別支援教育のセンター的役割があるので、小中学校への連携訪問など相談や指導助言の強化が期待されるそうです。

これまで支援学校なしで特別支援教育を頑張ってきた地域なので、保護者も戸惑うことがあるようです。支援学級に通っている子どもの保護者が、「今まで地域の学校で頑張ってきたけど、やっぱり支援学校に行かないかなのかなあ」と悩み、迷っているという話もあるそうです。

また早くから支援学校に在籍して地域の小中学生との交流がなくなると、地域の人に知られない、いわゆる



“いない子”になってしまうという心配があります。支援学校が、小豆すべての学校の児童生徒たちとの交流に積極的に取り組んでくれることを期待する声が上がりました。

障害のある子どもを保護者だけでずっと支えていくことはできないが、支援学校がハブになって支援者同士が連携し、保護者に情報を届けていくネットワークを新たに構築することができるのではないか、という意見も出ました。



● 高松東・東讃地域

5月31日

各グループでの意見交換後、全体での意見交換が行われました。話題の例は以下の通りです。

- ・発達について幼稚園等から保護者に伝える際の、理解を得られるような伝え方に苦慮している。
- ・5歳児のスクリーニング検査を園で実施している市では、園が保護者に発達の気づきを伝えることになる。そのような第1次宣告は園より専門家である医師から伝えてほしい。
- ・他市町の良い点を取り入れるために行政と事業者が協働して、より良い支援体制づくりを進めたい。
- ・子どもを対象とする事業所における、保護者との関係づくり、ビジョントレーニングを学ぶ必要性（子どもの意欲を高める療育を目指すため）、支援者同士が情報共有し、支援のネットワークを作成する重要性。
- ・福祉利用のハードルが低くなったことで、放デイ希望理由が多様になった（宿題をみてほしいなど）。
- ・本人が困って相談や支援を求めてくるケースの中には、親が認めてくれないケースがあり、本人が苦しんでいる。
- ・診断や相談を受けていない、グレーのまま生きてきた人は生きづらさを抱えやすい。小さい頃から社会に出ていくことを意識した対応が必要だと思う。
- ・当事者のキーパーソン（柱となる人）を捉えたい

での支援の必要性。親が柱となっている場合が多いため、親がいなくなった後も継続して支援が受けられるように機関が柱になる必要がある。

- ・本人の強みや興味を含めたアセスメントの重要性。また、相談支援事業所がそれらを踏まえた情報共有を行う必要がある。

● 高松西地域

6月5日

各グループでの意見交換後、全体での意見交換が行われました。会では、以下のような話題が出ました。

- ・見通しをもつことが苦手な特性から、「今を生きる」という行動に出てしまうため、生活面の支援では金銭管理や妊娠の可能性なども伝えていく必要がある。
- ・支援者の支援が必要（相談件数の増加や相談内容の多様化に伴い、時間外の対応が求められるケースなども増加。心理面に加えて業務体制の観点からも支援者の負担軽減についても考えるべき）。
- ・家族を支えるネットワークが必要。頑張っている家族の負担感や気持ちに目を向け、家族への支援についても考えていけたら。
- ・本人、家族、支援者等を含めたチームでの支援の重要性。医療の支援者も交えたケース会を開催する機会がより増えれば。
- ・親が様々な場所で相談をしていると、それを見て育った子どもはどこかに相談することが当たり前だと思える。親がどこかに相談することは、成人期を迎えた際の本人の相談しやすさにも繋がる。
- ・年齢に応じて様々な困り感や問題が生じる。年齢に応じた支援を考えていく必要がある。
- ・DVや虐待がある家庭で育った子どもが、学校などで暴力を振るう。「お父さんやお母さんがやっているのに僕がやったらだめなのはなぜ？」と言われると返す言葉がない。



※支援活動の中で困ったり悩んだりしたメンバーの方は、メンバー専用相談窓口を是時ご活用下さい！

詳細はマネジメントチームメンバー専用のホームページにある、「メンバー専用相談窓口のお知らせ」

(<http://www.kagawa-reha.net/pdf/membersen.pdf>) をご参照下さい。



香川県発達障害者支援センター『アルプスカガワ』
かがわ総合リハビリテーションセンター



香川県ふじみ園
相談支援センター